

栗原孝次著 「呑龍院」 発行に寄せて

田所町自治会会長 北川 清

田所町自治会会員の皆様にはますますご清栄のことと存じます。

昨年 10 月、当自治会顧問栗原孝次様が永年、記録しておいた「呑龍院」に関する冊子を私は一部頂戴した。折角の栗原顧問の労作であり、早速、理事会において披露した。理事会においては、大変貴重な記録であり、各戸配布をおこない、多くの皆様に読んでいただき、我がふるさと「田所町」へのより一層のご理解とご協力の一助にしたらとの結論を得るに至りました。

早速、栗原顧問に鋭意折衝の結果、昨年暮ご快諾をいただいた。発行に際し、栗原顧問の絶大なるご厚意により発行に至った次第でございます。この紙面をお借りして改めて心から厚く御礼申し上げます。本当に有り難うございました。

私は、この「呑龍院」発行によって、「呑龍院」が田所町における多くの先輩諸氏によって、激しい時代の荒波を乗り越え、営々と護持されてきた熱き思いとご努力について、子々孫々に伝えていく責任をいささかなりとも果たすことが出来たのではないかと思う次第であります。

昔から「温故知新（おんこちしん）」（古きをたずね新しきを知る）、「忠恕の心（ちゅうじょのこころ）」（忠（ちゅう）は、おもいやり、恕（じょ）は、まごころ）という尊い教えがあります。

良いものは未来永劫、大切にし、一方では新しいものを強く求め、加えて優しさをプラスしていけば、無意味な争いもなくなるでしょう。

さて、深谷宿（ふかやじゅく）と呼ばれていた頃、田所町は「新田町」（しんでんまち）と明治 22 年まで呼称されていたと伝えられています。

深谷宿の西の出入り口であった田所町には、他の町内には無い誇れる有形無形の文化が沢山あります。

1 番目は「呑龍院（どんりゅういん）」（子育て）であり、最も身近な存在であります。

2 番目は神社であり、「西島稲荷神社（にしじまいなりじんじゃ）」（商売繁昌）、「天手長男神社（あまのてなかお）」（火伏せ）として、田所町を守ってくださっております。

3 番目は、深谷宿の入り口として建立された「常夜燈」が約 160 年余の星霜を経、灯（明かり）を灯し続けております。（渋沢青淵翁誕生の年／天保 11 年／西暦 1840 年、建立された）

4 番目は、自治会員相互の「固い総（きずな）」があります。この 4 つが田所町の最大の誇りであり、宝であると信じます。

我々自治会執行部が「素晴らしいまちづくりをしよう」とのスローガンのもと、女性部・PTA ほか多くの方々のご支援ご協力方をいただきながら、今後も力一杯、総てに挑

戦して行く所存であります。

当地域の人々の「熱き力」を与えてくださることを心からお願い申し上げ、結びといたします。

平成 14 年正月 記

「呑龍院のこと」 一少年 K 一

私一少年 K 一は、田所町に生まれた。

少年 K が生まれる以前から、田所町内には、庶民の素朴な信仰を集めていた「呑龍院」はあった。この小さなお堂、呑龍様一河原堂一は、江戸初期の名僧「呑龍上人」をお祭りした堂宇であり、通称「どんりゅうさま」と言われている所である。

小さい時から馴れ親しんできた一通称一呑龍様一「河原堂(かわらどう)」とも言われ、子供や大人たちにとっての遊び場、憩いの場でもあった。

さて、呑龍上人は江戸時代「子育て呑龍」と称された高僧で、新生時児死亡の多かった時代背景から、子供の健やかな成長を願う素朴な親たちの心の支えとなり、親・兄弟等を失い、貧しい暮らしを余儀なくされた子供たちを育てるなどの社会事業活動等に尽力した僧侶でもある。その御遺徳を偲んで、連綿と続いている呑龍様なのである。

当時の多くの親たちがそうであったように。少年 K は母親の背中に背負われていた頃から鐘楼の鐘の音やご詠歌の鈴の音を聞きながら、毎月八日のご縁日には、お参りをした所である。お参り後、今も配られている赤い【呑龍上人】と印刷された紙の旗も懐かしい。

少年 K らは幼少時から、境内でのビーダマ遊び（タマッコロ遊び）や年末年始の時期には独楽回し、雨の日には鐘楼一鐘の下でのベーゴマ遊びに興じた。時には、境内は三角ベースの草野球場にもなった。女子は、まりつき・羽根つき・ゴム飛びの場所でもあった。

毎月八日の縁日には、善男善女の参詣人でごった返す境内、誰でも鐘楼に上がり鐘を突く。ゴオーンという鐘の音を背に、並び立つ露店のアセチレンガス燈の匂いを嗅ぎながら露店の間をかいぐぐっての鬼ごっこ、かくれんぼ等々、子供たちの遊び場として、懐かしい思い出の場であった。お堂の東の空き地には、旅芝居の小屋も建ったこともある。

日ごろから、親たちによって、呑龍上人と焼印された小さな木札「お守り」に水糸を通したものを肩にケサ掛けされ、危険な時には呑龍上人が守ってくれるとの素朴な信仰に支えられての少年 K の子供時代であった。そういう思い出のある呑龍様なのである。

《閑話休題》

現代社会におけるさまざまな青少年問題多発の折、学校教育・家庭教育・地域教育のあり方が取り沙汰されているが、憲法や教育基本法が禁じた特定の宗教教育ではなく、このような素朴な呑龍上人信仰は、日本の伝統的な宗教観に根ざした規範意識や生活習慣を学び、さらには宗教的情操や感性を育てる一つの縁(よすが)である思う次第である。

少年 K にとってさまざまな思い出のある「呑龍院」である。これからの田所町の担い手である子供たちが「自分たちの町をよく知る」 「郷土を愛する」 「より良い人間に育つ」

ということと「地域の子は地域で育てる」大人の責任として、我が郷土の呑龍院が、いつまでも田所町の人々の固い絆として弓は継がれることを願って止まない。

「わが町」「わが郷土」「われらが呑龍院（どんりゅうさま）」

夏まつり みんなの笑顔 新田町

桜咲く 呑龍院の 鐘の鳴る

(註) ご縁日ー八日ーは、呑龍上人関係寺院で「呑龍講」の結ばれた日である。

上人は、弘治 2(1556) 年 4 月 29 日、現春日部市生まれ、元和 9(1623) 年 8 月 9 日
寂 68 歳

はじめに

前に「吞龍院」について一冊子を作成したが、即製のこともあって誠に粗末のものであった。そこで、もういちど書き直してみることにした。勿論、やり直してみてもそんなに目新しいものが出来るわけがない。大同小異のものきりこしらえられないことは止むを得ないと思っている。

前にも言った通りこういう事柄については全く資料らしきものがなく、ほとんど漠然とした記憶を頼りに書きつづる程度のものできり出来ない。しかしながら、この漠然とした記憶でも、時がたてば何時か消滅してしまい、後の人に、なんで記録ぐらいしておかなかったのかと言われるかもしれない。そんな訳で、不慣れな筆を運びながら再度書き直してみることにした。

平成 七年 五月 栗原孝次

目次

- 第 一 章 口伝による河原念仏堂
河原念仏堂

- 第 二 章 呑龍講の発祥（戦前の部）
 - ・呑龍講の由来
 - ・呑龍講の発足（戦前の部）
 - ・昭和初期の呑龍様かいわい

- 第 三 章 戦後の呑龍院
 - ・戦後の推移
 - ・呑龍講の発足（戦後の部）
 - ・呑龍院の維持

第一章 口伝による河原念仏堂

河原念仏堂（深谷町誌・昭和十二年発行より抜粋）

- | | |
|--------|-------------------------|
| 一、寺号 | 念仏堂 |
| 二、開基 | 西運寺第十五了吞和尚氏 延宝四年（1675年） |
| 三、所在 | 深谷町大字西島字元西 |
| 四、寺域 | 七畝十二歩 |
| 五、本尊 | 阿弥陀如来 木彫 |
| 六、焚鐘 | 正徳五年乙未六月（1715年） |
| 七、寺宝 | 憂陀羅 |
| 八、戦死者墓 | 武藤定吉氏 日露戦役 |
| 九、檀家 | 五十軒 |

当寺には近年吞龍上人の木像安置せられ、上人関係の御寺となり毎月八日をもって縁日となし参詣者群衆多大の御利益にあやかっている。

伝によれば、当寺には祐天上人も来駕せられたことがあるよしにて、上人のものしたる四面妙号を角石に刻んである。

河原念仏堂

河原堂ともいい念仏堂ともいう。どちらが本当なのかと言われれば、通称は河原堂と呼ばれたが、堂の名前はといえば念仏堂と言う。と理解していいと思う。

上唐沢川と中仙道の交わる場所、そこにひとつのお堂があった。名付けて河原念仏堂という。前記の町誌にも記されている通り約三百年の昔のからあったことと思われる。

河原堂という名称といい、すぐ西に河原という地名があることといい、いかにこの川が古くよりこの地域を洗い流していたかがうかがわれる。明治四十三年の大水の時、この川も出水して、近隣に水害を与えたと伝えられている。その上流（清心寺の東）は小高い山林となっていた。そこは南部の広大な山林の水を集め深谷の低地へ奔り出るところにあたり、急斜面を削り取って高さ十米にも及ぶ絶壁をかたち造っていた。名付けてどん沢という。ここは終戦後埋め立てられて現在宅地になっている。（上野台一番地）。

この川が高崎線をくぐりぬけたところ（勿論昔は鉄道などなかったが）に共同墓地がある。この墓地があつてお堂ができたのか、お堂があつて墓地が形成されたのかはさだかではないが、関連しあつてこの地域に存在したことは自然の理であつたらう。そこは中仙道深谷宿の西のはずれでもあつた。

昭和五年頃、高崎線の南側に唐沢堤が完成したことによってこの川（上唐沢川）の流れは東へむくことになり、鉄道以北は単なる掘割となった。しかしその広い川幅は埋め立てられるまで残っていて昔の川の面影をとどめていた。昭和四十年頃完全に埋め立てられて暗渠となり、その姿を消したわけで現在の広い道路がその名残をのこしているが、正確な形は土地台帳に河川敷として記入されている。ついでながら唐沢堤の造成も当時の畑を切り割って造られたもので土地台帳を見ればその様子を推察することができる。

祐天上入

町誌に見られる通り、この堂には祐天上人が来駕されたという記録が残っている。

祐天上人

1636年～1718年の人（百科辞典・・・より抜粋）

江戸時代の僧。明蓮社顕誉と称し愚心と号した。福島の人。十二才で江戸増上寺の明誉檀通について出家。師とともに諸寺を遊学した。徳川将軍綱吉、家宣の帰依をうけて千葉の大巖寺、弘経寺、江戸の伝通寺に住寺し、1711年、増上寺三六世となり大僧正に任ぜられた。晩年目黒に隠棲し、没後弟子祐海がその庵跡に祐天寺を建立、祐天がその開山とされた。

祐天上人は増上寺の僧ということで浄土宗である。また、この堂の開基は西運寺ということで、この念仏堂は浄土宗に属する堂であることがわかる。

そんな関係で祐天上人が来駕されたということになっているが、後で触れるが上人が書かれた四面妙号を刻した角石が安置されているということや、寺宝の大毘陀羅が上人の意向によって当堂に寄進されたということからみると、上人の当堂に対する関係は大変深い係わりがあったことと思われる。増上寺の大僧正となられた高僧がこんな片田舎の堂に深い関係があったということは、何か不思議なおもむきがして来る。河原念仏堂も寺でこそないけれども何か由緒あるお堂ではなかったかという感じがしてくるのである。

しかしここは堂である。堂守の人はその時に応じて住居していたけれども正式の住職がいず、従って寺としての格式はなかったようである。それ故墓地についても宗派を問わない共同墓地となっている。

戦国時代から江戸時代において念仏衆・門徒衆の勢力は、時により政治をも脅かす力になっていたとも伝えられている。しかしそれはそれとして、一般庶民の念仏信仰については、現代の我々には想像できないほどのものが生活の中に根づいていたと思われる。浄土宗の根本は念仏三昧に尽きるといふ。その念仏信仰が一般民衆によって行われていた場所がこの念仏堂ではなかったか。

百万遍の念仏といい、念仏踊りともいい、それらの現象を我々は口伝で聞くことはあっても実際に見たことはない。しかしこういうお堂が存在していたと言うことが、何か昔の人の生活を垣間見る思いがするものである。

四面妙号碑

前にもふれた通り当境内に祐天上人の書かれたという四面妙号の碑がある。四面妙号の碑とは四角の石碑の四面に南無阿弥陀仏と刻みこまれた碑である。なぜ四面に刻まれてあるのか。ふつうは正面にだけかいてあればよいのではないかと思う。これについても言い伝えがある。この碑は最近境内の整備のために現在位置に安置してあるが昔はもっと境内の中の方にあった。そして念仏信仰の民衆がこのまわりを回りながら念仏を唱えるためのものであった。そのための石碑だった。だから四面に南無阿弥陀仏と刻まれているのである。例えては失礼にあたるかとも思うが、盆踊りのときの櫓に相当するような物ではなかったろうか。これによって念仏信者は祐天上人のご偉徳を崇敬しながらこの碑のまわりを回り念仏祈念に励んだと伝えられている。

余談になるが、境内整備のためにこの碑を移動した際、地中より小さな骨壺が三つ堀出された。この壺のなかの白骨の主はいずれの人か知るすべもないが、当碑の真下に埋められていたところから相当な人のものであろうと推察される。この壺の中のひとつが破損を免れたため、丁寧に木箱におさめて本堂に安置されている。

百万遍の大数珠

当堂に保存されているもののひとつとして、長さ数米の百万遍大数珠がある。これも念仏信者が集まって念仏を行ずるときに使われたものである。この大数珠を持って輪をつくり念仏を一回唱えるごとに珠を一個移すことによってその回数を確かめるためのものであろうと思われる。大分擦り減っているところを見ても、長らく使いこなしした物と察せられる。これと同形のものが京都知恩院に展示されてあった。品質材料ともに立派でこれと比較できるものではないが、浄土宗の念仏行の仏具として存在していたという事実を知ることが出来る。

大毘陀羅

通称おまんだらと言われている。町誌にも記載されている通り、当堂の寺宝として保存されている。

縦約一間、横約一間半の大作で精密な仏画が金粉を使って見事に描かれている。

毘陀羅の説明となると平安密教にまでさかのぼらなければならず、到底ここで踏み込むわけには行かないが、簡単に言えば、菩薩浄土の世界を絵によって示し、修行僧が悟り

に到着するための助けとする仏具のひとつである、と理解してもよいのではないか。

この大憂陀羅であるが、なぜ当堂にあるのかということについては次のような由来がある。

これは栗原吉三郎氏が古老よりの言い伝えを書き残したものであり、そのままを記載する。

「此の大壘陀羅について、私が幼少の頃老人より言い伝えとして聞くところによれば、宿根村の野口某氏が江戸で金融業を営み居りし時、たまたま某旗本に金融いたし督促したところ立腹し手打ちにされんとしたところを、はからずも 祐天上人に助けられたので此の大員陀羅を謝礼として差し上ぐ可く申し上げしところ、野口氏実家の近くにある深谷宿常念仏堂に上人が修行中住まい居りし事あるをもって、この堂に奉納せよとのことにて、この常念仏堂に保存せしある事と伝え効いている」

第二章 呑龍講の発祥 戦前の部

(大正中期 ～ 昭和二十年)

呑龍上人 (百科辞典・・ より抜粋)

江戸初期の僧。俗名井上、はじめ曇竜といい源蓮社然与と称した。号大阿故信。武蔵国 (埼玉) の人。十三才のとき同国の林西寺で出家し、江戸増上寺に入って存心から宗脈を伝えられ林西寺、大善寺に住寺した。後に上野 (群馬) 新田の太田大光院の開山となった。干ばつに竜神の社で百万遍の念仏を行い験があったと伝えられる。又、墮胎日帰り等の悪習を矯正し懇ろに子女を養育して社会教化に専念し子育呑龍として高名である。元和九年 (1623年) 寂。八十二歳。

呑龍講の由来

これについても当時の係わった人々がすでになく、私の聞き覚えのなかから、とくに栗原吉三郎氏の語りをもとにして書き記してゆくこととする。

頃は大正の初期のころであろうか、小川というお坊さんが太田の呑龍院の世話になっていた。時の住職より「お前に呑龍上人の仏像を授ける。これを守護することによって生計を立つべし」として拝領したのが当呑龍院の御本尊である。小川坊さんはこれを河原念仏堂に安置した。そしてこの堂に住むこととなった。その後彼は、念仏の御布施によって或いは、呑龍上人のお腹子料等により収入を計ったがなかなか生活がうまくゆかず、とうとうこの仏像を持って夜逃げをしてしまった。そこで時の世話人が探したところ、高崎に質入れしてあるのを見つけだした。世話人代表栗原芳次郎氏は、そこで金を出してこの仏像を質屋から買い戻し、再び河原堂に安置することが出来た。

その後世話人達は、折角当堂のご本尊となられた呑龍上人を、字民一同でお世話し、そのご利益をあまねく近隣の人達に分かち合い併せて、町内の発展に寄与したいということになった。そのためにはどうしてもこの呑龍上人御分身の証書、いわゆるお墨付きを戴かなければならない。ということで群馬太田の大光院 (呑龍院) へお願いに出掛けることとなった。

ところが太田呑龍院が言われるには、当時深谷より三か所から呑龍上人のご分身願いが来ている。それは、田所町のほか本町と本住町とである。このような状態では例えどちらの願いを聞き入れても他に差し障りを生ずる。それではかえってためにならない結果になると思われるので折角のお願いながらすべてをお断りする。ということになった。

そこで世話人一同は思案の末、呑龍上人の本山である八王子の大善寺へお願いに行くことになった。代表数人で大善寺へ訪れると時の住職は快くこれを承諾し呑龍上人御分身の証書を拝領することが出来た。

時は、昭和四年十月二十五日

世話人、高田鋼剛郎・茂呂源太郎・後藤謙次・他これによっていよいよ、呑龍講が大きく発足することとなった。

呑龍講の発足（戦前の部）

講の発足ということは、大変な決意によって出発されたというように想像される。それも一人や二人の力で持ち上げられるものではない。大勢の人の熱意と協力が一つに結集して始めて成し遂げられる大事業であると思われるのであります。恐らくは時の区長（自治会長）を始めとして字の有力者、町の有志の協力を得て世話人が一丸となってこれに遭進したことと思われる。たまたま講の宣伝と思われる写真が残っているが、自動車に呑龍の幕を巡らしたその景色は熊谷の荒川大橋ではなかろうかと思われる。今と違って自動車を借り上げたということ自体なみたいていの意気込みではなかったことを感じさせられる。またいかに広範囲に募集して回ったかも想像がつく。

石碑（後に記す）に刻された文章によっても五千人の講社という言葉がある通り、その規模の多さが推察されるのである。

講の仕組みに付いては知るすべもないが、だいたい戦後の講に似たようなやり方で行われたのではないかと察せられる。車のないこの時代に足と自転車での運動をして回った人々の努力にはまことに敬服する次第である。その行われた時期についてもはっきりはしないが、昭和の初め頃から昭和十二年頃までではなかったかと思われる。その後社会は戦時体制にはいり、このような行事も次第に廃止せざるをえない世の中へと突入していった。

呑龍上人御分身記念塔の石碑

当堂の境内に表記の石碑が建てられている。碑の内容をみればわかる通り、呑龍講を成し遂げた記念碑として建立されたものである。これだけ立派な碑を立て後世にそれを残したと見ても、関係者の講に対する熱意と、講が如何に盛大であったかということが偲ばれてくる。また、我々の立場からすれば、当時の記録としては唯一つの資料として現存するものであって、まことに貴重なものを残していただいたと感心するものである。これを次にそのままの文章で記載することにする。

「呑龍上人御分身記念塔

呑龍上人御尊像を本堂に安置せるは大正七年十一月なり。当時住職の転住と共に御尊像安置不能の止むなきに至らんとするや当字信者世話人代表栗原芳次郎氏痛く之を憂い私財を喜捨し以て御尊像の安置を永久ならしむ可く手続中病篤く後事を同字茂呂源次郎氏に託し卒然として逝きぬ。茂呂氏よく其の意を継ぎ当時字区長外有志の応援を得て世話人一同と協力し御分身の証を本山より昭和四年十月二十五日受領す。爾来茂呂氏は

五千人講社の結成を計り選ばれて長となるや講社の経営に全力を傾注し遂に今日の隆盛を見るに至れり。偶々昭和十二年四月八日第三回講社満講となるにあたり吞龍上人の御偉徳を永遠に称へ併せて

故栗原芳次郎

茂呂源次郎

両氏の熱誠を後世に伝えんが為め貞石に刻す次第也 坂本米太郎 藤森 誠
昭和十二年四月八日 建之 栗原九蔵 栗原猪三郎 為田鋼剛郎 柴崎宗十郎」

吊鐘にまつわる霊蹟

吞龍上人の御偉徳の一つとして次のような事実がある。

時は大正十二年十月八日の縁日の日であります。午後三時頃のこと、たまたま町内の子供達が二十数名鐘楼上で鐘をつき戯れていたところ、俄然空風が起こり子供達は何事かと一瞬概外に逃れたと同時に一大音響と共に大吊鐘が墜落し土中五寸余りめりこんだ。この間二三秒の間の出来事で一人の負傷者もなく風も納まり平日と変わらない。他の人も気付かず子供達は只々アレヨアレヨと顔を見合わすのみで大人達が駆けつけた時は、鐘の回りを夢中で逃げたと口々に答えるだけであった。この事が人々の噂に広まり上人の霊験あらたかな御偉徳は益々近隣に高まって行った。

この時の子供のなかの一人は私の近所の人で未だにその時の様子を話し伝えている。

吞龍様の縁日について

この頃（昭和初期）の記憶はあまりはっきりしていないが、漠然とした景色として私の脳裏に浮かんでくる。縁日、その日は一日中楚鐘の音がたえる事なくなり続いている。そして人が引きも切らずに行き交う。女性の着物も普段と違う派手やかさが漂う。露天商が立ち並ぶ。綿あめ、鼈甲あめ、おもちゃ、ふうせん、子供はじっとしていられなくなる。特に夜の印象が強い。各家の軒先には吞龍上人の提灯が吊されて火がともされる。たちならぶ露天商ごとにカーバイトの火が輝く。本堂の方がやたらに明るい。今と違って自動車は通らない。中仙道は露天商で両側がふさがり、そのあいだを人がもみ合いながら動いてゆく。私の家の東の方は植木屋が陣取っていた。人なみは本町あたりまでつづいているようだ。

夜空に白い煙が立ちのぼり、夜店の光と鐘の音と人のざわめきが交ざり合って縁日の夜はふけてゆく。

観音様の縁日

当堂には観音様の縁日があって毎年八月二十日に行われている。どう言う縁起によっていつ頃から行われていたのかわからない。堂内に安置されている観世音菩薩像がご本尊であると言うことはわかる。しかしながら毎年盛大に縁日を催してお肥りするということとは何かその観音像にまつわる由来があったのではなかったかと想像できる。しかし、何の記録もなく口伝えも残っていない。ただ、縁日の習慣だけが受け伝えられているのである。

これも昭和初期のことであるが、観音様の縁日を記憶のなかから思い浮かべて見よう。八月二十日の観音様の縁日、それは当然真夏の暑い日のことである。朝から楚鐘が鳴り続く。世話人達が本堂へ集まって何かやっている。子供達もその回りへあつまって行く。それは行灯作りだった。四角な木枠に半紙を貼りそれに絵具で一筆画を描いてゆく。句のようなものもあったようだ。出来た行灯は町内中へ配って軒先に吊してもらう。それを配るのは子供の役目であった。家へ帰るとお勝手では鰻頭作りの真っ最中である。汗をながして大釜でゆで鰻頭を山のように茹で上げている。あんこの味が甘くてうまい。親戚知人へ配ってまわるようである。本堂は灯明が輝き鐘の音が響く、暑い夏の日のことである。

これらの縁日も戦時色が社会を覆い始めると共にだんだん消えていった。しかし月の八日には誰ともなく参詣の人が訪れ鐘をならし祈念して帰って行く。それらの人影がわびしく昔日の名残をとどめていた。

昭和初期の呑龍様かいわい

ここで余談になるが、昭和初期の頃の呑龍様近辺の風景を思い付くままに記してみたい。

富国館跡

富国館は昭和の初期には既がない。大正十五年に火災を出しその後復興ならずして倒産してしまった。

富国館が設立されたのは明治三十二年と言われ最盛期には建坪三千坪余、従業員千五百人という深谷町最大級の製糸工場として繁栄したと言われる。当然田所町はこの会社の城下町の観を呈し諸行事やお祭りの賑やかさは古老の語り草となっていた。その華やかさが盛大であるほど跡の面影は一抹の淋しさが漂っている。その一つに煙突があった。呑龍様の墓地の南側に添って東西にコンクリの煙道があった。その穴は一米ぐらいの広

さで子供がもぐり込めるほどである。その西端にそびえ立っていたのがコンクリ製の大煙突だった。この煙突が深谷地震（昭和六年九月）のさいに崩れ落ち、下で遊んでいた子供五人が犠牲になった。後に供養のため呑龍様の境内に地藏様としてまつられている。このなかに地震の災害の模様を写した貴重な写真が飾られている。

粟島様

前述の煙道と高崎線の間が空地になっていてその中央あたりに粟島様という神社があった。これも富国館の名残であったと思われる。この社の縁日に紅白の幕と提灯が張られ賑わった景色をおぼえている。その後この社はいつしか片付けられご神体は呑龍様にある。

豊年座

豊年座と言えば我々の年代で一町十ヶ村（現在の深谷市と岡部町の範囲）のなかで知らない人はいない。ここも富国館の跡地であり昭和四年に創立された。映画のほか実演も開催され昭和三十五年閉館されるまで近隣の多くの人々がおとずれ、町の娯楽の中心地として盛況であった。この時代はテレビも車もない世の中で映画館は唯一の娯楽施設であったといえる。

新世界

豊年座の入口から東の地域一帯にかけて娯楽遊興街が形成された。人呼んで新世界という。いまの若い人にはちょっと想像できないことと思われるが、これまた当時の深谷町屈指の歓楽街であった。喫茶店、バー、一杯酒場等が豊年座の東の道に軒を並べ近隣に知られた界限だった。

富国館屋敷跡

現在の OK ビルと吉田医院の一面である。ここも富国館倒産後のこときり私にはわからない。当時は芹沢さんという人が住んでいたようだ。この煉瓦塀に囲まれた二建ての大家屋は昭和六十年近くまで現存していたのである程度の想像はつく。古老の話によれば、その大邸宅の南側に公園と呼ばれた大庭園がありそこは樹木あり築山あり池ありと贅を尽くし孔雀などの動物も飼われていたという。その東側の広い道で富国館のお祭りなどの行事が賑々しく執り行われたという話を伺っている。

上唐沢川

これについては最初にふれてある。高崎線をくぐって北へぬけると西側に水道小屋があり東側は煙突跡があり墓地とつづく。墓地の川縁りは流れに削られ篠が生い茂り細い道

が通じていた。流れはそこをカーブして中仙道と交わる。コンクリの一しかりした橋である。戦争末期にはこの橋の下を空襲警報の時の非難場所とした。消防小屋は現在の場所にあり火の見櫓がたっていて火災の時は半鐘を打ちならした。ここから樋口木工所の西側を流れ東へ向きを変える。この角の筋向いに山車小屋があり小川綿屋さんの方へ細い道が下りてゆく。ここから東へ向かうと細い橋がいくつも掛かり道と家屋の橋渡しをしている。この北通り道は土手の役目を果していたようで、道の北側は一段低い畑となっておりその先は西大沼、曲田の広大な田圃となっていた。何もない。今の西小の南口の位置に水源の碑がひとつ畦道の中に立っていた。また、西小の北西の位置に赤堀（あかっぼり）という沼があり土手に囲まれて田圃の真ん中に見えていたのが印象に残っている。そのほかは何もない。みわたすかぎり田圃が続いていた。現在そこは住宅で埋まっている。

呑龍様境内

前にふれた通り、通称は河原堂、堂名は念仏堂、そして別の通称は呑龍様と言われている。

北側入口は中仙道と地続きになっていて側溝もない。そこに門というほどのものではないが二本の丸木に屋根を付けたような簡単な門が立っていた。

本堂のすぐ西には大銀杏が聳え立ち、そこから鐘楼にいたる間に大木が二三本あってその枝葉は天を覆うほどであった。一番の古木には中程に洞があり子供がかくれんぼのとき登ってその穴にかくれた。この大木が並んでいる根元にはいくつもの石像石仏が並んで安置されていた。木陰にしつとりと苔むした石像群はなにか靈気を漂わせているようであった。鐘楼の北（道路側）には馬頭尊の碑が建っていた。

道路をこえた相向かいにある常夜塔は現存している。江戸時代に建てられたもので富士講の盛んであった頃を物語っている。私の家に富士山登頂の講中の写真が残っている。

境内の西側は沢井頭の住居で町内の集会所となっていた。その南は練炭工場があり道の相向かいが事務所であったように記憶している。

境内の東側は私の家まで草の生えた空き地であった。材木などが置いてあったりしたが、境内と共に子供たちにとっては恰好の遊び場であったことは間違いない。

地震と火災

地震については昭和六年九月二十一日に発生した深谷地震である。富国館の煙突が倒れ子供が亡くなったことは前に述べた。私の四才の時に記憶はあまりはっきりしていない。家こそ倒れはしなかったが、店の中は濠々と埃がたちこめ、積んであった練炭がくずれ

落ち家具は倒れ足の踏み場もない光景がおぼろに浮かんでくる。

火災については大正十五年の富国館の火災がある。これによって富国館が倒産してしまっただことは前にふれた。この時は私の家の裏手に火がせまりあわやというところまで燃えたがあやうく難をまぬかれたという話をきかされた。これは私のまだ生まれる前のことである。

火災についてもう一つ昭和九年三月頃の大火がある。樋口木工から小暮紺屋、須藤鍛冶屋、後藤さん、長谷川団子や、と五軒全焼し私の店が半焼した火災である。夜中に起きた火事であった。この時の記憶であるが、類焼の危険が迫ってきたのでカバンを持って親戚へ逃げていった。東から振りかえると夜空に火炎が燃え上がりおりからの西風に煽られ私の家の屋根に襲いかかっている様子がいまだに目に焼きついている。後からの話では消防小屋の火の見櫓では火にあぶられそうになりながら必死にすり鐘を打ち続けたという。呑龍様の吊鐘も股々と夜空に響いた。翌日、黒々と燃え崩れた五軒分の焼け跡をながめ呆然と立っていたことをおぼえている。

第三章 戦後の呑龍院

(昭和二十年以後)

戦後の推移

昭和二十年八月十五日真夏の日が照り続けていた盆の十五日の正午、玉音がラジオ放送されて戦争は終結した。日本国民はすべて呆然としてこの後どうなることかひそひそと話しあうのみであった。そんな状態からそれぞれが自分の生きる道についてぼつぼつと模索し始めて行った。

鐘

鐘楼の吊鐘は戦争末期に兵器を作るために国へ供出した。それが返還されるということで世話人が引取に行き持って来て再び鐘楼に吊すことが出来た。昭和二十一年七月のことでこれは鐘に刻んである。但し品物は元の鐘を探し出すことが出来ず似たような別の鐘を割当てられて持ちかえたものであった。

ところがなんと四十年後（昭和六十一年九月）千葉県鎌ヶ谷市の職員の方が訪ねてきて、この鐘は同市の人の先祖が同市内の寺へ寄進したもので、このたび市誌を編纂するにあたりここにあることを伝え聞き資料にしたいと言うことであった。二三人の方々が見えられお話してのち鐘に刻まれてある文字を拓本にお取りになって帰って行かれた。

町内管理

終戦後まもなくのこと、字の財政逼迫のおり、どなたかの提案で呑龍様を町内管理にしたらいくらか収入のたしになるのではないかということになった。そして町内の役員さんが世話人に加わった。ところが思ったほど賓錢が上がりず手間ばかりかかると言うことで結局一年ぐらいで取り止めになってしまった。

そして又、数人の世話人で管理することとなった。

世話人

当堂には戦前より長原光勝氏が住寺していた。

終戦の頃は大塚勝造氏がお世話していたように記憶している。

町内管理の後、世話人としては次のような人々がお世話するようになった。

栗原吉三郎

茂呂 熊太

横山 熊蔵

高田 直澄

樋口 万吉

栗原 孝次

登 記

終戦後、占領軍の指示であろうか、すべての神社仏閣の土地は国の物と言うことになった。そしてその後にそれぞれの寺社が払い戻しを受けるということになった。しかしこの堂は寺としての資格がないために払い下げを受けることが出来ずそのままになっていた。時の世話人は、これでは永久に国のものになってしまうということで相談の末、西運寺さんをお願いして西運寺名義で払い下げてもらうことにした。その結果、当堂の権利書には西運寺名義と記されることとなった。但し以上の様ないきさつであるが故に当堂の潜在的権利はやはり呑龍院世話人にあることになる。昭和二十五年頃のことである。

名称

前にもふれた通り、当堂は通称河原堂とよばれ堂名を念仏堂と称して来たが、呑龍講(戦前)が盛んになるにつれて人は呑龍様と呼ぶようになっていた。そこで世話人代表栗原吉三郎氏は西運寺住職島田誠敏氏の了解を得て、正式呼び名を呑龍院とすることとした。その時期は昭和三十年代になってからのことと思われる。

呑龍講の発足（戦後の部）

前述の世話人達で呑龍院の維持運営に当たっていたがなかなか思うように行かない。要するに収入がない。たとえば提灯一つ作るにも寄付を集め、その人の子供の名を書き込むというやり方をとらなければならなかった。「お肚子」と言うこともある。これは呑龍上人像の中に空間があり、そこに小さい巻物が入れてある。それに子供の名を書き込むことによって子供の将来の健康をお守りして頂くとする祈願であって、それに付いてご寄進をしてもらおう、という方法であった。

堂は古くいろいろ手を加えたい。しかし肝心の収入がない。世話人が集まる度に思案する。そしてそのたびに出てくる考えはといえばそれは「講」を発足させるということであった。考えては止めまた考える。それらを繰り返しながらとうとう実行しようという決断に到達するわけである。

西運寺

そこで西運寺住職にこれを諮り了解を求めることになる。住職島田誠敏氏は世話人代表栗原吉三郎氏に対して言った。呑龍様についてすべて貴方（吉三郎氏）にお任せするから思う通りにおやりなさい。それについての金銭的援助は一切しません。しかしどこから文句がきても私が責任をもちます、と。

大善寺

大善寺については前にふれた通り、戦前の講発足にあたり呑龍上人御分身の証を拝領した寺である。そこで講の発足を決意した世話人一同は再び大善寺を訪れることになった。

八王寺の大善寺へ赴いた一行であったが、その日はあいにく大僧正は出張中であった。しかし一行はその出張先を訪ねて千桑にてようやく面会することが出来た。大僧正は大変喜ばれ一同に対し、呑龍上人のご偉徳を布教する事業について益々精進してもらいたいとの励ましの言葉を述べ、世話人一同に感謝状を賜った。

感謝状

八王子 大横町 浄土宗檀林勅願所

大善寺住職

正僧正 田中 智肇

昭和二十九年九月二十日

世話人代表殿

高田直澄・茂呂熊太・栗原孝次

栗原吉三郎・樋口万吉・横山熊蔵

世話人

何をするにも基は人である。この講の発足に当たって町内挙げての体制を構成することになった。

講長は島田誠敏氏を推し、顧問に木村一郎氏を筆頭に関根銀造氏、石川清治氏を始め町内有力者すべての方のご参加を願い三十数名の世話人組織が出来上がった。これらのひとびとが呑龍講にむかって活動を開始したわけである。時あたかも昭和三十年、深谷市制発足の年であった。

実施

講の内容としては、世話人（前にふれた役員世話人とは違う）になって貰える人のところへ一冊の講帳に手拭い一本を付けて五人一組の講員を募集してもらう。その中の一人が代参者として参詣に来てもらい五回で終了する。代参日は四月八日と十月八日とする。五講以上募集した世話人には招待状を出す。という仕組みである。

そこで役員世話人一同は手分けをして北は豊里、明戸から南は用土、川本に至まで親戚知人を訪ねて飛び回った。第一回の募集は約八百講位であったかと思われる。八百講といえば掛ける5で四千人の講員を募集したことになる。

第一回目の講日

いよいよ皆さん方の努力の結晶が実現する日がやって来た。昭和三十年四月八日である。この日の盛況と言うか混雑と言うかはちょっとその類をみないものであった。

代参者には、御札の他に酒と寿司が付き湯茶の接待をするほか豊年座の入場券も発行する。また、当時の唐沢堤は近隣随一の桜の名所として最盛期にあった。代参に当たった人はこの日を楽しみに近所の人と誘い合わせながら続々と参集してきた。一方、世話人は朝早くより集まって、栈敷を組み受付その他の持ち場を決めて待ち受けたまではよかったが、初回のため判断が甘かった。殆どの信者が、朝のうちに代参を済ませその後ゆっくり花見を楽しもうと、午前九時頃になると多数の代参者が集まり境内は何百人の人で埋まってしまった。それに対し受付は、帳面を受けて代参者の名前を記入し、印を押し、お金を貰ってお釣りを渡し、引換え券を渡してから御札とお寿司を引換えてもらう。説明をしなければならぬ人も有りなかなか捗らない。受付の前は人が押し合い、横から割り込む人、大声を出す人など益々混雑を増すばかり、世話人たちも右往左往てこまいでどうにもならない。諦めてひとまず帰った人がお昼ごろ来ても混雑は一向に衰えない。やっと収まりが見えて来たのは午後四時頃になってからと言う次第。世話人たちは昼食も食べることが出来ずへとへとになってしまった。幸いなことに信心のことうえ強く文句を言う人もなく、どうやらその日を終了することが出来た。

講の継続

こんな形で発足した呑龍講も世話人の努力により順調に継続して行くことになったがその間、いろいろな経過を経ていった。

一回だけであったが余興に大神楽を呼んで催したことがあった。西の川をまたいで舞台を作りその上で演芸をやってもらった。勿論、代参者へのサービスである。ところがあいにくのことに季節外れの雪が降る寒い日となり散々な結果に終わった。以後このような催しはやっていない。

豊年座の映画券の発行も二三回で止めになった。映画も時代の変化の波には勝てず豊年座も数年後には廃館となった。

台坂の上にヘルスセンターというものがあって戦後一時盛んであったが、その入場券を発行したこともあった。

前にもふれたが、講は一度募集すれば五人講なら五回継続することになる。また加入者にとっては五分の一の払込みで代参することが出来る。しかしいろいろ厄介な点もある。理屈から言えば第一回の代参者の数と同じ数の人が終わりまできてくれる筈である。ところが実際は、なかなかそうはいかない。大勢の中には忘れる人もいる、やめてしまう人もいる。天候の悪い時は出足がにぶる。又、組のなかで転居してしまう場合もおきってくる。そんなわけで当日幾人来てくれるかということで何時も頭を悩ました。来てもらえなければ講金も入らない。一番困るのがお寿司である。追加は間に合わないし余っ

ても返品は出来ない。ある年は予想が外れて百以上の寿司が余ってしまったことがある。

観音様

前にもふれたが、当堂には観音様が安置されており、戦争前には毎年八月二十日がその縁日ということで盛大に法要が行われ屋台店が出て参詣者で賑わっていたが戦時中と共にそれらも消滅して行った。戦後は世話人により毎年八月二十日の縁日には法要は催していたが、限られた人達だけで行い一般の人々にはあまり知られていなかった。

昭和四十年代になってようやく世の中も落ちつきを取り戻し、深谷祭りとか民謡流しが行われるようになった。そこで吞龍院世話人たちは地域の親睦の一助になればということで八月中の盆踊りの一環として観音様奉納民謡盆踊り大会を行うこととなった。当日は境内の中央に櫓を立て、町内婦人会の方々のご協力により賑やかに行われた。これまた毎年継続され年中行事の一つとして人々に親しまれてきた。

カラオケ大会

昭和五十八年に町内有志によりカラオケ会が発足した。そしてこれまた町内の親睦のため大会を開く案が浮上してきた。そこで時代の流れということで民謡踊りを男女カラオケ大会に切り替えて吞龍院の境内内で、八月二十日に観音様奉納カラオケ大会として実施することとなった。字の親睦と慰安を目的とするということで自治会協賛により盛大に挙行されて現在に至っている。

昭和四十年頃の世話人名簿

議長 島田 誠敏

顧問 木村 一郎 関根 銀造 滝沢 昇平 石川 清治

相談役 寺田 孝三郎 岡本 鶴松 河田 信吉 西脇 喜三 藤森 宇平 大沢 喜作
金井 鶴一

常任世話人 横山 熊蔵 栗原 吉三郎 樋口 万吉 金井 島太郎 上田 好雄 秋山 正雄
栗原 孝次 長原 勇司

世話人 高田 直澄 葦塚 秀雄 坂本 辰雄 須藤 誠一 小暮 義一 猪野 秀三
大塚 憲造 小谷野 義治 田村 弥一 福島 佐市 五明 忠治 関口 伊好
中野 れい子 茂呂 てつ 影山 かね

呑龍講募集記録

第一回	昭和三十年	昭和三十一年	昭和三十二年	五人講・春秋五回で満講（約八百講）
第二回	昭和三十二年	昭和三十三年	昭和三十四年	五人講・春秋五回で満講（約八百講）
第三回	昭和三十五年	昭和三十六年	昭和三十七年	六人講・春のみ三年で満講（二人づつ）
第四回	昭和三十八年	昭和三十九年	昭和四十年	六人講・春のみ三年で満講（二人づつ）
第五回	昭和四十一年	昭和四十二年	昭和四十三年	三人講・春のみ三年で満講（一人づつ）
第六回	昭和四十四年	昭和四十五年	昭和四十六年	三人講・春のみ三年で満講（一人づつ）
第七回	昭和四十七年	昭和四十八年	昭和四十九年	三人講・春のみ三年で満講（一人づつ）
<p>昭和五十年以降は一人講となり、毎年募集することとなった。</p> <p>昭和五十五年 約千七百人</p> <p>昭和六十年 約二千人（最高）</p> <p>この後やや講数は減るものの、現在（平成七年）に至も諸世話人のご協力により毎年盛大に継続されている</p>				

呑龍講の維持

以上のように呑龍講もようやく軌道に乗り、呑龍上人の名声も高まり、呑龍院の経営も順調に推移することとなった。

時の常任世話人代表栗原吉三郎氏はその中心となり、ますます院の発展に熱意を傾け、その他の常任世話人も一致してよくその任を尽くした。

長原光勝氏は昭和十五年頃に当堂に従寺して以来穏やかな性格でよく堂のために尽力し昭和四十年に亡くなられた（八十四才）。そのあとを継がれた長原勇司氏は若い力でよく吉三郎氏を支え呑龍院の発展に大きく寄与して現在に至っている。

一方、吉三郎氏の子息栗原久次氏は、昭和四十年中頃より田所町自治会長となり、時の理事さんを世話人に参加してもらい、田所町の呑龍様という基本を充実させた。残念ながら昭和五十三年四月、五十四才という若さで亡くなられた。

余談になるが昭和五十三年四月、田所町と河原町との合併が成立した。田所町自治会長栗原久次氏と河原自治会長清水貫一氏は、よく両町の意向を纏め上げなかなか実現の難しい町内合併という大事業を成功させた。その直後の出来事であった。そこで急遽町内の推薦により私が自治会長を引き継ぐこととなった。呑龍講についても吉三郎氏の依頼により、世話人代表としての職務を任されることとなり現在に至っている。

呑龍院の改善事業

当本堂は、明治の中頃藤沢の某寺を移転して建築したものであると言い伝えられている。そんなわけで相当老朽化した状態になっていた。そこで講の発展にともない逐次その改善工事が施され現在に至っている。

本堂経機の購入

これは本堂の正面におかれている経機である。

昭和三十年九月

中仙道に面したブロック塀と門柱の建設

いままで境内には囲いが無かったがこれによって整然と形がととのった。門柱に刻まれた呑龍院の文字は、前にふれた通り西運寺住職の了承された名称である。

昭和三十三年十月

本堂奥殿の改築工事

本堂中央奥の祭壇を広く高くするため建物自体を屋根から改築した。これによって前側の畳の間は大広間となり、祭壇は奥深く且つ天井の高い立派な本堂となった。

昭和三十四年

本堂の床改修工事と畳替え

本堂の畳大広間の床が老朽化しているため全面改修と畳替えをした。

昭和六十年三月

大扇額（呑龍上人）

本堂の正面にかかっていた額板が色あせたので新たに制作し正面中央に掲げる。

制作者 小林徳太郎氏 西島の人。草丘又は石寿と号す。拓本、刻書の権威者。

昭和六十一年十二月

墓地整憐事業とブロッケン響の建設工事

この墓地は川縁りに接して篠が生い茂り、墓地内は立木が乱生していた。そこでそれらを整地し周りをブロック塀で囲った。尚、呑龍院境内にあった幾つもの石碑は墓地の北東隅に移転安置してある。

昭和四十九年

天蓋の購入

寺院には無くてはならない天蓋であるが世話人の努力により立派なものを具えることが出来た。

昭和五十六年四月

本堂の床改修工事と畳替え

本堂の畳大広間の床が老朽化しているため全面改修と畳替えをした。

昭和六十年三月

大扇額（呑龍上人）

本堂の正面にかかっていた額板が色あせたので新たに制作し正面中央に掲げる。

制作者 小林徳太郎氏 西島の人。草丘又は石寿と号す。拓本、刻書の権威者。

昭和六十一年十二月

本堂に安置せる仏像

阿弥陀如来像

観世音菩薩像

勢至菩薩像

弥陀三尊（みださんぞん）と称せられ当堂の御本尊であったと思はれ、大変古いと言われる。

観世音菩薩像

八月二十日の観音様の縁日の御本体である。鎌倉時代の作と言われる。

吞龍上人像

吞龍講における御本体である。

文殊菩薩像

あまり大きくないが古くより安置されている。

学問の神様と称される。

境内に安置されている石碑等

五体地藏尊堂

本文中にある深谷地震の際崩れた富国観の煙突の犠牲になった子供を供養して記った地藏尊石碑と御堂

四面妙号石碑堂

本文中にある佑天上人の直筆によると言われる念仏石碑とそれを安置した御堂

釈迦座像

地藏尊立像

吞龍上人御分身記念塔

本文中にある吞龍上人御分身の記念碑

墓地に安置されている石碑

これは、昔から境内に安置されてあった石碑類を、境内の整備事業のとき墓地の北東部に移転して安置したものである。（完成 昭和四十九年）

経塔

庚申塔

寄付者名

千手観音碑

馬頭尊碑

寄付者名

鐘撞建築記念碑

寄付者名（ 明治二十三年 ）

堂宇修繕記念碑

寄付者名（ 大正十一年 ）

大黒天石碑

あとがき

永年にわたり呑龍院の維持発展に尽くした栗原吉三郎氏は平成三年四月、九十八才の天寿を全うして亡くなられた。その功績を讃えることによってこの文章の結びとしたい。

ここまで、いろいろ呑龍様にまつわる事について記して来たが、筆足らずして尽し足りないことの多々あることを遺憾に思う。特に、既に亡き幾人もの方々について記録し得ないことはまことに残念であるが人物素描の難しさ故、割愛したのも又止むを得ないと思っている。

ただ、書き進みながら、やはり田所町あつての呑龍様であり、この後、時代は移り変わって行こうとも呑龍様は田所町の人に支えられて存続して行くことと思う。

本稿は、忘れ去られてしまいそうな過去を、ほんの一部ではあるが記録に止めて置きたいということで拙文をかえりみず纏めてみた。それ故、近年のことがらについてはあまりふれていない。それらについては又どなたかによって改めて作成されることを期待するものである。

平成七年五月二十日 深谷市田所町 栗原孝次

呑龍院

平成14年1月1日 発行

著者 栗原孝次

発行者 北川 清